



働く者の闘いと学習こそ



長生きをねらったのか、安倍内閣は「理解しにくい解散」を行い第47回衆院選が行われた。だから投票に行かぬ国民が半数近く、戦後最低の投票率だったが与党（自・公）は2/3の議席を確保した。私たちの課題なり思うことをいくつか。

第一に、自民党支持「圧勝」ではない。3割弱の得票率で、有権者総数から見れば約1・5割の支持で、6割強の議席を得ている。この民意を反映していない小選挙区制を変えていく声を広めていきたい。

第二に、本土のメディアは沖縄問題を（生命かけての辺野古基地移設反対運動も）ほとんど報じてない。選挙の争点にもならず。しかし、沖縄全選挙区で自民党完敗だった。この沖縄の闘いに学ぼう。いのちとくらしに根づいた願い、ねばりつよい闘い、幅広い共闘。選挙争点からさげられた集団的自衛権問題や原発問題や教育問題もだが「自民圧勝」のあと、内閣は「戦争のできる国づくり、人づくり」に発言トーンを

あげ、原発再稼働へも「熱心」。許せない。沖縄の闘いに学び、大衆運動の盛りあげで悪政と闘おう。

第三に、安倍内閣は「圧勝」に乗じて、実質的に集団的自衛権容認や秘密保護法施行で改悪してきた憲法を明文的にも改悪する発言が増えている。「再び戦争をくり返さない」ために全力で、しかも小異を残して大同につく姿勢で憲法改悪阻止の戦線を広め強めねばならない。

最後に、これらの課題、闘いは働く者（労働者・勤労国民）が中心、先頭に立たねばならない。戦後の労働運動、平和運動の歴史はそれを教えている。私たち働く者にかけている労働法制の改悪など、あらゆる働く者のいのちや権利をそまつにする攻撃に反撃する闘いと学習に全力をあげ、社会的諸課題（改憲阻止を頂点とする政治闘争）と結合しよう。労働者は社会の主人公であり、歴史を創る中心である。労働大学でまなぶ学習活動で闘いの確信と展望を！

『月刊まなぶ』企画編集委員 稲葉 耕一（いのちと平和を考える会）